

二、三羽——十二、三羽

泉鏡花

青空文庫

引越しをすることに、「雀はどうしたろう。」もう八十幾つで、耳が遠かつた。——その耳を熟じつと澄ますようにして、目をうつとりと空を視めて、火桶にちよこんと小さくいて、「雀はどうしたろうの。」引越しをすることに、祖母のそう呟いたことを覚えている。「祖母さん、一所に越して来ますよ。」当てずツボに気安めを言うと、「おお、そうかの。」と目皺を深く、ほくほくと頷いた。

そのなくなつた祖母は、いつも仏の御飯の残りだの、洗いながしのお飯粒を、小窓に載せて、雀を可愛がつていたのである。

私たちの一一向に氣のない事は——はれて雀のものがたり——そらで嵐雪の句は知つても、今朝も轟さえずつた、と心に留めるほどではなかつた。が、少からず愛惜の念を生じたのは、おなじ麹町だが、土手三番町に住つた頃であつた。春も深く、やがて梅雨も近かつた。……庭に柿の老樹が一株。遣放しに手入れをしないから、根まわり雑草の生えた飛石の上を、ちょこちよことよりは、ふよふよと雀が一羽、羽を拡げながら歩行っていた。家内がつかつかと跣足はだしで下りた。いけずな女で、確に小雀を認めたらしい。チチチチ、チユ、チユツ、すぐに掌の中に入つた。「引摶ひっつかんじや不可い、そつとそつと

。」これが鶯か、かなりやだと、伝統的にも世間体にも、それ鳥籠をと、内にはないから買ひに出る処だけれど、対手が、のりを舐める代もので、お安く扱われつけているのだから、台所の目笊でその南の縁へ先ず伏せた。——ところで、生捉つて籠に入れる、一ひとときと経たないうちに、すぐに薩摩芋を突ついたり、柿を吸つたりする、目白鳥のよう早く人馴れをするのではない。雀の児は容易く餌につかぬと、祖母にも聞いて知つていたから、このまだ草にふらついて、飛べもしない、ひよわなものを、飢えきしてはならない。——きっと親雀が来て餌を飼おう。それには、縁では可恐がるだろう。……で、もとの飛石の上へ伏せ直した。

母鳥は直ぐに来て飛びついた。もう先刻から庭樹の間を、けたたましく鳴きながら、あつちへ飛び、こつちへ飛び、飛騒いでいたのであるから。

障子を開けたままで覗いているのに、仔の可愛さには、邪険な人間にに対する恐怖も忘れて、目笊の周囲を二、三尺、はらはらくるくると廻つて飛ぶ。ツツと笊の目へ嘴を入れたり、颶と引いて横に飛んだり、飛びながら上へ舞立つたり。そのたびに、笊の中の仔雀のあこがれようと言つたらない。あの声がキイと聞えるばかり鳴き繋つて、引切れそうに胸毛を震わす。利かぬ羽を渦にして抱きつこうとするのは、おつかさんが、嘴を笊の目に、

その……ツツと入れては、ツイと引く時である。

見ると、小さな餌を、虫らしい餌を、親は嘴に銜えているのである。笊の中には、乳離ちばなれをせぬ嬰兒だ。火のつくように泣立てるのは道理である。ところで笊の目を潜らして、口から口へ哺めるのは——人間の方でもその計略だつたのだから——いとも容易い。

だのに、餌を見せながら鳴き叫ばせつつ身を退いて飛廻るのは、あまり利口でない人間にもの確に解せられた。「あかちゃんや、あかちゃんや、うまうまをあげましょ、其処を出ておいで。」と言うのである。他の手に封じられた、仔はどうして、自分で笊が抜けられよう？ 親はどうして、自分で笊を開けられよう？ その思おもひはどうだろう。

私たちは、しみじみ、いとしく可愛くなつたのである。

石も、折箱の蓋も撥飛ばして、笊を開けた。「御免よ。」「御免なさいよ。」と、雀の方より、こっちが顔を見合させて、悄気げつつ座敷へ引込んだ。

少々極きまりが悪くつて、しばらく、背戸へ顔を出さなかつた。

庭下駄を揃えてあるほどの所帯ではない。玄関の下駄を引抓んで、晚ばんがた方背戸へ出て、柿の梢の一つ星を見ながら、「あの雀はどうしたろう。」ありたけの飛石——と言つても五つばかり——を漫ぞろに渡ると、湿けた窪地で、すぐ上が葱や苔、竜の鬚の石垣の崖になる、

片隅に山吹があつて、こんもりした躑躅が並んで植つていて、垣どなりの灯が、ちらちらと透くほどに二、三輪咲残つた……その茂つた葉の、蔭も深くはない低い枝に、雀が一羽、たよりなげに宿つていた。正に前刻の仔に違ひない。：様子が、土から僅か二尺ばかり。これより上へは立てないので、ここまで連れて来た女親が、わりのう預けて行つたものらしい……敢て預けて行つたと言いたい。悪戯を詫びた私たちの心を汲んだ親雀の気の優しさよ。……その親たちの時は何処？……この嬰児ちやんは寂しそうだ。

土手の松へは夜鷹が来る。築土の森では木兎が鳴く。……折から宵月の頃であつた。

親雀は、可恐いものの目に触れないように、なるたけ、葉の暗い中に隠したに違ひない。もとより藁屑も綿片もあるのではないが、薄月が映すともなしに、ぼつと、その仔雀の身に添つて、霞のような気が籠つて、包んで円く明かつたのは、親の情の朧氣ならず、輪光を顯わした影であろう。「ちよつと。」「何さ。」手招きをして、「来て見なよ。」家内を呼出して、両方から、そつと、顔を差寄せると、じつとしたのが、微に黄色な嘴を傾けた。この柔な胸毛の色は、さし覗いたものの襟よりも白かつた。

夜ふかしは何、家業のようだから、その夜はやがて明くるまで、野良猫に注意した。彼奴が後足で立てば届く、低い枝に、預つたからである。

朝寝はしたし、ものに紛れた。午の庭に、隈なき五月の日の光を浴びて、黃金の如く、銀の如く、飛石の上から、柿の幹、躑躅、山吹の上下来を、二羽縦横に飛んで舞つてゐる。ひらひら、ちらちらと羽が輝いて、三寸、五寸、一尺、二尺、草樹の影の伸びるとともに、親雀につれて飛び習う、仔の翼は、次第に、次第に、上へ、上へ、自由に軽くなつて、卯の花垣の丈たけを切るのが、四、五度たび馴れると見るうちに、崖がけをなぞえに、上町うわまちの樹の茂りの中へ飛んで見えなくなつた。

真綿を黄に染めたような、あの翼が、こう速に飛ぶのに馴れるか。かつ感じつつ、私たちは飽かずに視めた。

あとで、台所からかけて、女中部屋の北窓の小窓の小縁に、行つたり、来たり、出入りするには、五、六羽、八、九羽、どれが、その親と仔の二羽だかは紛れて知れない。

一二、三羽、五、六羽、十羽、十二、三羽。ここで雀たちの数を言つたついでに、それぞれの道の、学者方までもない、ちよつとわけ知りの御人に伺いたい事がある。

別の儀でない。雀の一家族は、おなじ場所では余り沢山には殖えないものなのであるか知ら? 御存じの通り、稻塚、稻田、粟黍の実る時は、平家の大軍を走らした水鳥ほど羽音を立てて、駆なわてゆ行き、畔あせゆ行くものを驚かす、夥おび多しい群団むれをなす。鳴子なるこ

も引板も、半ば——これがための備だと思う。むかしのもの語にも、年月の経る間には、おなじ背戸に、孫も彥も群るはずだし、第一椋鳥と塘を賭けて戦う時の、雀の軍勢を思いたい。よしそれは別として、長年の間には、もう些と家族が栄えようと思うのに、十年一日と言うが、実際、——その土手二番町を、やがて、いまの家へ越してから十四、五年になる。——あの時、雀の親子の情に、いとしさを知つて以来、申出るほどの、さしたる御馳走でもないけれど、お飯粒の少々は毎日欠かさず撒いて置く。たとえば旅行をする時でも、……「火の用心」と、「雀君を頼むよ」……だけは、留守へ言つて置くくらいだが、さて、何年にも、ちょっと来て二羽三羽、五、六羽、総勢すぐつて十二、三羽より数が殖えない。長者でもなくせに、俵で扶持をしないからだと、言わればそれまでだけれど、何、私だつて、もう十羽殖えたぐらいは、それだけ御馳走を増すつもりでいるのに。

何も、雀に託けて身代の伸びない愚痴を言うのではない。また……別に雀の数の多くなる事ばかりを望むのではないのであるが、春に、秋に、現に目に見えて五、六羽ずつは親の連れて来る子の殖えるのが分つているから、いつも同じほどの数なのは、何處へ行つて、どうするのだろうと思うからである。

が、どうも様子が、仔雀が一羽だちの出来るのを待つて、その小児だけを宿に残して、親雀は時をかえるらしく思われる。

あの、仔雀が、チイチイと、ありツたけ嘴を赤く開けて、クリスマスに貰つたマントのようすに小羽を動かし、胸毛をふよふよと揺がせて、こう仰向いて強請ると、あいよ、と言つた顔色で、チツ、チツと幾度もお飯粒を嘴から含めて遣る。……食べても強請る。ふくめつつ、後ねだりをするのを機掛けに、一粒銜えて、お母さんは屏の上——（椿の枝下で茲にお飯が置いてある）——其処から、裏露地を切つて、向うの瓦屋根へフツと飛ぶ。とあとから仔雀がふわりと縋る。これで、羽を馴らすらしい。また一組は、おなじく餌を含んで、親雀が、狭い庭を、手水鉢の高さぐらいに舞上ると、その胸のあたりへ附着くように仔雀が飛上る。尾を地へ着けないで、舞いつつ、飛びつつ、庭中を翔廻りなどもする、やつぱり羽を馴らすらしい。この舞踏が一斉に三組も四組もはじまる事がある。卯の花を搔乱し、萩の花を散らして狂う。……かわいいのに目がないから、春も秋も一所だが、晴の遊戯だ。もう些と、綺麗な窓掛け、絨毯を飾つても遣りたいが、庭が狭いから、羽とともに散りこぼれる風情の花は沢山ない。かえつて羽について来るか、嘴から落すか、植えない壺の紫が一本咲いたれども、蓼が穂を紅らめる。

ところで、何のなかでも、親は甘いもの、仔はずるく甘ッたれるもので。……あの胸毛の白いのが、見ていると、そのうちに立派に自分で餌えが拾えるようになる。澄ました面つらで、コツンなどと高慢に食べている。いたずらものが、二、三羽、親の目を抜いて飛んで来て、チュツチュツチユツとつつき合あいの喧嘩けんかさえ遣る。生意氣なまいきにもかかわらず、親雀がスーツと来て叱しかるような顔いかをする。喧嘩けんかの嘴くちばしも、生意氣な羽はも、忽ちぐにやぐになつて、チイチイ、赤坊あかんぼう声こゑで甘つたれて、餌えを頂戴うまうまと、口を張ぱりひらいて胸毛をふわふわとして待まちか構まえる。チチツ、チチツ、一人でお食べなと言つても肯きかない。頬辺ほつぺたを横に振つても肯きかない。で、チイチイチイ……おなかが空いたの。……おお、よちよち、と言つた工合に、この親馬鹿が、すぐにのろくなつて、お飯まんまつぶ粒ごの白い処ところを——贅沢ぜいたくな奴やつらで、内うちのは挽割麦ひきわりまを交ませるのだがよほど腹はらがすかないと麦むぎの方へは嘴くちばしをつけぬ。此奴こいつら、大地震の時は弱つたぞ——啄ついばんで、嘴くちばしで、仔の口へ、押込み揉おしこみ揉もみこ込むようにするのが、凡そ堪およたまらないと言つた形で、頬摺ほおづりをするように見える。

怪けしからず、親に苦労を掛ける。……そのくせ、他愛たわいのないもので、陽気がよくて、お腹なかがくちいと、うとうととなつて居いね睡むりをする。……さあさあ一ひときり露台みはらしへ出ようか、で、堀の上から、揃つてもの干ほしへ出たとお思いなさい。日のほかほかと一面に当る中に、

声は噪ぎ、影は踊る。

すてきに物干が賑だから、密と寄つて、隅の本箱の横、二階裏の肘掛け窓から、まぶしい目をぱちくりと遣つて覗くと、柱からも、横木からも、頭の上の小廂からも、暖な影を湧かし、羽を光らして、一斉にパツと逃げた。——飛ぶのは早い、裏邸の大枇杷の樹までさしわたし五十間ばかりを瞬く間もない。——（この枇杷の樹が、馴染の一家族の時なので、前通りの五本ばかりの桜の樹（有島家）にも一群巣を食つているのであるが、その組は私の内へは来ないらしい、持場が違うと見える）——時に、女中がいけどんざいに、取込む時引外したままの掛け棹が、斜違いに落ちていた。硝子一重すぐ鼻の前に、一羽可愛いのが真正面に、ぽかんと留まつて残つてゐる。——どうかして、座敷へ飛込んで戸惑いするのを掴えると、掌で暴れるから、このくらい、しみじみと雀の顔を見た事はない。ふつくりとも、ほつかりとも、細い毛へ一つずつ日光を吸込んで、おお、お前さんは飴で出来てゐるのではないか、と言いたいほど、とろんとして、目を眠つてゐる。道理こそ、人の目と、その嘴と打撞りそうなのに驚きもしない、と見るうちに、踏えて留つた小さな脚がひよいと片脚、幾度も下へ離れて辺りかかると、その時はビクリと居直る。……煩つて動けないか、怪我をしていないかな。……

以前、あしかけ四年ばかり、相州逗子に住つた時（三太郎）と名づけて目白鳥がいた。

桜山に生れたのを、おとりで捕つた人に貰つたのであつた。が、何処の巣にいて覚えたろう、鶴駒鳥、あの辺にはよくいる頬白、何でも囁く……ほうほけきよ、ほけきよ、ほけきよ、明かに鶯の声を鳴いた。目白鳥としては駄鳥かどうかは知らないが、私は大の、ご秘蔵——長屋の破軒に、水を飲ませて、芋で飼つたのだから、笑つて故と（ご）の字をつけておく——またよく馴れて、殿様が鷹を据えた格で、掌に置いて、それと見せると、パツと飛んで虫を退治た。また、冬の日のわびしさに、紅椿の花を炬燵へ乗せて、籠を開けると、花を被つて、密を吸いつつ嘴を真黄色にして、掛蒲団の上を押廻つた。三味線を弾いて聞かせると、音に競つて軒で高囁りする。寂しい日に客が来て話をし出すと障子の外で負けまじと鳴きしきる。可愛いもので。……可愛いにつけて、断じて籠には置くまい。秋雨のしよぼしよぼと降るさみしい日、無事なようとに願い申して、岩殿寺の觀音の山へ放した時は、煩つていた家内と二人、悄然として、ツイーツイーと梢を低く坂下りに樹を伝つて慕い寄る声を聞いて、ほろりとし

て、一人は袖そでを濡らして帰つた。が、——その日白鳥の事で。……（寒い風だよ、ちよぼ一風いちかぜは、しわりごわりと吹いて来る）と田越村たごえむら一番の若衆わかいいしゆうが、泣声を立てる、大根の煮える、富士おろし、西北風ならいの烈しい夕暮に、いそがしいのと、寒いのに、向うみずむこうみずに、がたりと、門かどの戸をしめた勢いきおいで、軒に釣つた鳥籠とりのくらをぐわたり、バタンと撥返はねかえした。アツと思うと、中の日白鳥は、羽ばたきもせず、横木を転げて、落葉はさまの挟はさむつたようにな落ちて縮はさまんでいる。「しまつた、……三太郎が目をまわした。」「まあ、大変ね。」と櫻さくらがけのまま庖丁ほうちょうを、投げ出して、日白鳥を掌てのひらに取つて据えた婦は目に一杯涙たすぎを溜めて、「どうしましよう。」そ、その時だ。こころみちようすばち試こころみに手水鉢てのみちやくばちの水を柄杓ひしゃくで切つて零しづくにして、露にして、日白鳥の嘴を開けて含まして、襟えりをあけて、膚はだにつけて暖めて、しばらくすると、ひくひくと動き出した。ああ助たすかりました。御利益ごりやくと、岩殿いわとの方へ籠を開いて、中へ入れると、あわれや、横木へつかまり得ない。おつこちるのが可憐こわいのか、隅の、隅の、狭い処ところで小くなつた。あくる日一日は、些よみがえど、ご惱氣のうけと言つた形で、摺餌すりえに嘴くちばしのあとを、ほんの筋ほどつけたばかり。但し完全に蘇よみがえ生つた。

この経験がある。

水でも飲まして遣りたいと、障子を開けると、その音に、怪我けがこころ処か、わんぱくに、しか

も二つばかり廻つて飛んだ。仔雀は、うとりうとりと居睡いねむりをしていたのであつた。……

憎くない。

尤もなかなかの悪戯いたずらもので、逗子の三太郎……その目白鳥めじろう——がお茶の子だから雀の口真似くちまねをした所為せいでもあるまいが、日向ひなたの縁えんに出して人のいない時は、籠のまわりが雀どもの足跡だらけ。秋晴あきばれの或日あるひ、裏庭の茅葺かやぶき小屋の風呂の廂ひさしへ、向うへ桜山さくらやまを見せて掛けて置くと、午少し前の、いい天氣で、閑な折から、雀が一羽、……丁ど目白鳥の上の廂合の樋竹ひあわいといだけの中へすぱりと入つて、ちょっと黒い頭だけ出して、上から籠を覗のぞきこむ。嘴に小さな芋虫いもむしを一つ銜くわえ、あつち向いて、こつち向いて、ひよいひよいと見せびらかすと、籠の中のは、恋人から来た玉章たまざきほどに欲しがつて駈上り飛上かけあがとびあがつて取ろうとすると、ひよいと面を横にして、また、ちよいちよいと見せびらかす。いや、いけずなお転婆てんぱで。……ところがはづみに掛つて振つた拍子ひょうしに、その芋虫をポタリと籠の目へ、落したから可笑い。目白鳥は澄まして、ペロリと退治た。吃驚仰天びっくりぎょうてんした顔をしたが、ぽんと樋の口を突出されたように飛んだもの。

瓢箪ひょうたんに宿る山雀やまがら、と言う謡うたがある。雀は樋の中がすきらしい。五、六羽、また、七、八羽、横にずらりと並んで、顔を出しているのが常である。

あるの
或殿がりょうぶんめぐり
領分巡回の途中、菊の咲いた百姓家に床几を据えると、
背戸畑の梅の枝
に、
おおき
大な瓢箪が釣してある。梅見と言う時節でない。

「これよ、……あの、瓢箪は何に致すのじやな。」

その農家の親仁が、

「へいへい、山雀の宿にござります。」

「ああ、風情なものじやの。」

能の狂言の小舞の謡に、

いたいけしたるものあり。
張子の顔や、練稚兒。
しゆくしゃ結びに、ささ結び、や
ましな結びに風車。瓢箪に宿る山雀、胡桃にふける友鳥……
「いまはじめて相分つた。——些少じやが餌の料を取らせよう。」

小春の麗な話がある。

御前のお目にとまつた、謡のままの山雀は、瓢箪を宿とする。こちどらの雀は、棟割
ながや
長屋で、樋竹の相借家だ。

腹が空くと、電信の針がねに一座ずらりと出て、ぽちぽちぽちと中空高く順に並ぶ。
なかぞら
中でも音頭取りが、電柱の頂辺に一羽留つて、チイと鳴く。これを合図に、一齊にチ
いつとき

イと鳴出す。——壇と枇杷の樹の間に当つて。で御飯をくれると、催促をするのである。

私が即ち取次いで、

「催促てるよ、催促てるよ。」

「せわしないのね。……煩いよ。」

などと言いながら、茶碗に装つて、婦たちは露地へ廻る。これがこのうえ後れると、勇悍なのが一羽押寄せる。馬に乗つた勢で、小庭を縁側へ飛上つて、ちよん、ちよん、ちよんちよんと、雀あるきに扉を抜けて台所へ入つて、お竈の前を廻るかと思うと、上の引窓へパツと飛ぶ。

「些と自分でお働き、虫を取るんだよ。」

何も、肯分けるのでもあるまいが、言の下に、萩の小枝を、花の中へすらすら、葉のはさらさら……あの撓々とした細い枝へ、壇の上、椿の樹からトンと下りると、下りたなりにすつと這つて、ちよつと末を余して垂下る。すぐに、くるりと腹を見せて、葉裏を潜つてひよいと攀じると、また一羽が、おなじように壇の上からトンと下りる。下りると、すつと枝に撓つて、ぶら下るかと思うと、翻然と伝う。また一羽が待兼ねてトンと下りる。一株の萩を、五、六羽で、ゆさゆさ揺つて、盛の時は花もこぼさず、嘴で銜えたり、

尾で跳ねたり、横顔で覗いたり、かくして、裏おもて、虫を漁りつつ、滑稽けてはずんで、ストンと落ちるかとすると、羽をひらひらと宙へ踊つて、小枝の尖へひよいと乗る。

水上さんのがこれを聞いて、莞爾して勧めた。

「鞆韁を拵えてお遣んなさい。」

邸の庭が広いから、直ぐにここへ気がついた。私たちは思いも寄らなかつた。糸で杉箸を結えて、その萩の枝に釣つた。……この趣をおもむきのりきを乗氣で饒舌ると、雀の興行をするようだから見合わせる。が、鞆韁に乗つて、瓢箪ぶつくりこ、なぞは何でもない。時とどく、壙の上に、いま睦じく二羽啄んでいたと思う。その一羽が、忽然として姿を隠す。飛びもしないのに、おやおやと人間の目にも隠れるのを、……こう搜すと、いまいた壙の笠木の、すぐ裏へ、頭を揉込むようにして縦に附着しているのである。脚がかりもないのに巧なもので。——そうすると、見失つた友の一羽が、怪訝な様子で、チチと鳴き鳴き、其処らを覗くが、その笠木のちよつとした出張りの間に、頭が附着しているのだから、どつちを覗いても、上からでは目に附かない。チチツ、チチツと少時搜して、パツと枇杷の樹へ飛んで帰ると、そのあとで、密と頭を半分出してきよろきよろと見ながら、嬉しそうに、羽を揺つて後から颶と飛んで行く。……惟うに、人の子のするかくれんぼである。

さて、こうたわいもない事を言つてゐるうちに——前刻言つた——仔どもが育つて、ひとりだち、ひとり遊びが出来るようになると、胸毛の白いのばかりを残して、親雀は何処へ飛ぶのかいなくなる。数は増しもせず、減りもせず、同じく十五、六羽どまりで、そのうちには、芽が葉になり、葉が花に、花が実になり、雀の咽^{のど}が黒くなる。年々二、三度おんなじなのである。

……妙な事は、いま言つた、萩^{はぎ}また椿^{つばき}、朝顔^{あさげ}の花、露^{つゆくさ}草などは、枝にも蔓^{つる}にも馴れ馴^な染んでいるらしい……と言うよりは、親雀から教えられているらしい。——が、見馴れぬものが少しでもあると、可恐^{こわ}がつて近づかぬ。一日でも二日でも遠くの方へ退いている。尤も、時にはこつちから、故とおいで儀を御免蒙^{ごめんこうむ}る事がある。物干^{ものほし}へ蒲団^{ふとん}を干す時である。

お嬢さん、お坊ちゃんたち、一家揃つて、いい心持^{こころもち}になつて、ふつくりと、蒲団^{だんらん}を試みるのだから堪らない。ぼとぼと、あとが、ふんだらけ。これには弱る。そこで工夫をして、他所から頂戴^{よそ}して貯えていた豹^{ひょう}の皮を釣つて置く。と枇杷^{びわ}の宿にいやすく、裏屋根へ来るのさえ、おつかなびつくり、(坊主^{てん}びつくり^{てん}豹^{ひょう}の皮)だから面白い。が、一夏^{ひとなつ}縁^{えん}日で、月見草^{つきみそそう}を買つて来て、萩^{はぎ}の傍^{そば}へ植えた事がある。夕月に、あの

花が露を香わせてぱツと咲くと、いつもこの黄昏には、一時留り餌に騒ぐのに、ひそ
まり返つて一羽だつて飛んで来ない。はじめは怪しぃんだが、二日め三日めには心着いた。
意氣地なし、臆病。鳥瓜、夕顔などは分けても知己だろうのに、はじめて咲いた月
見草の黄色な花が可恐いらしい……可哀相だから植替えようかと、言ううちに、四日め
の夕暮頃から、漸つと出て來た。何、一度味をしめると飛ついて露も吸いかねぬ。

まだある。土手三番町の事を言つた時、卯の花垣をなどと、少々調子に乗つたようだ
けれど、まつたくその庭に咲いていた。土地では珍しいから、引越す時一枝折つて來
さし芽にしたのが、次第に丈たかく生立ちはしたが、葉ばかり茂つて、蓄を持たない。丁
ど十年目に、一昨年の卯月の末にはじめて咲いた。それも壇を高く越した日当のいい一
枝だけ真白に咲くと、その朝から雀がバツタリ。意氣地なし。また丁どその卯の花の枝の
下に御飯が乗つてゐる。前年の月見草で心得て、この時は澄ましていた。やがて一羽ず
つ密と来た。忽ち卯の花に遊ぶこと萩に戯るるが如しである。花の白いのにさえ怯えるの
であるから、雪の降つた朝の臆病思うべしで、枇杷塚と言いたい、むこうの真白の木の丘
に埋れて、声さえ立てないで可哀である。

椿の葉を払つても、飛石の上を搔分けても、物干に雪の溶けかかつた処へ餌を見せても

影を見せない。炎天、日盛の電車道には、焦げるような砂を浴びて、蟠蠍の斧と言つた強いのが普通だのに、これはどうしたものであろう。……はじめ、ここへ引越したてに、一、二年いた雀は、雪なんぞは驚かなかつた。山を兔が飛ぶように、雪を蓑にして、吹雪を散らして翔けたものを——

ここで思う。その児、その孫、二代三代に到つて、次第おくり、追続ぎに、おなじ血筋ながら、いつか、黄色な花、白い花、雪などに対する、親雀の申しふくめが消えるのであろうと思う。

泰西の諸国にて、その公園に群る雀は、パンに馴れて、人の掌にも帽子にも遊ぶと聞く。

な故に、わが背戸の雀は、見馴れない花の色をさえ恐るのであろう。實に花なればこそ、些とも変つた人間の顔には、渠らは大なる用心をしなければならない。不意の礫の戸に当る事幾度ぞ。思いも寄らぬ蜜柑の皮、梨の核の、雨落、鉢前に飛ぶのは数々である。

牛乳屋が露地へ入れば驚き、酒屋の小僧が「今日は」を叫べば逃げ、大工が來たと見ればすくみ、屋根屋が來ればひそみ、畠屋が來ても寄りつかない。

いつかは、何かの新聞で、東海道の何某は雀うちの老手である。並木づたいに御油から赤坂まで行く間に、雀の獲もの約一千を下らないと言うのを見て戦慄した。

空氣銃を取つて、日曜の朝、こここの露地口に立つ、狩獵服の若い紳士たちは、失礼ながら、犬ころしに見える。

去年の暮にも、隣家の少年が空氣銃を求め得て高く捧げて歩行いた。隣家の少年では防ぎがたい。おつかいものは、ただ煎餅の袋だけれども、雀のために、うちの小母さんが折入つて頼んだ。

親たちが笑つて、

「お宅の雀を狙えれば、銃を没収すると言う 約 条 すみです。」

かつて、北越、俱利伽羅を汽車で通つた時、峠の駅の屋根に、車のどどろくにも驚かず、雀の日光に浴しつつ、屋根を自在に、樋の宿に出入りするのを見て、谷に咲残つた撫子にも、火牛の修羅の巷を忘れた。——古戦場を忘れたのが可いのではない。忘れさせたのが雀なのである。

モウパツサンが普仏戦争を題材にした一篇の読みだしは、「巴里は包囲されて飢えつゝ悶えている。屋根の上に雀も少くなり、下水の埃も少くなつた。」と言うのではなかつた

か。

雪の時は——見馴れぬ花の、それとは違つて、天地を包む雪であるから、もしこれに恐れたとなると、雀のためには、大地震以上の天変である。東京のは早く消えるから可いもの、五日十日積るのにはどうするだろう。半歳^{はんさい}雪に埋^うもるる国もある。

或^{ある}時^{とき}も、また雪のために一日形^{かたち}を見せないから、……真^{ほん}個^{とう}の事だが案^{そん}じていると、次の朝の事である。ツイ——と寂しそうに鳴いて、目白鳥^{めじろ}が唯一羽、雪を被^かいで、紅^{くれな}に咲いた一輪、寒椿^{かんつばき}の花に来て、ちらちらと羽も尾も白くしながら枝を潜^{くぐ}つた。

炬^{こたつ}燼^{から}から見ていると、しばらくすると、雀が一羽、パツと来て、おなじ枝に、花の上^{うえし}下^{した}を、一所^{いつしょ}に廻^{まわ}つた。続いて三羽五羽、一斉^{いつとき}に皆來た。御^{おまんま}飯^{くちばし}はすぐ嘴^{くちばし}の下にある。パツパ、チイチイ諸^{もろ}きおいに歓喜の声を上げて、踊りながら、飛びながら、啄^{ついば}むと、今度は目白鳥^{まじ}が中へ交^{つきあ}つた。雀同志は、突合^{つつきあ}つて、先を争つて狂つても、その目白鳥にはおとなしく優しかつた。そして目白鳥は、欲しそうに、不思議^{なが}そうに、雀の飯^{いい}を視めていた。

私は何故^{なぜ}か涙ぐんだ。

優しい目白鳥は、花の蜜に恵まれよう。——親のない雀は、うつくしく愛らしい小鳥に、教えられ、導かれて、雪の不安を忘れたのである。

それにつけても、親雀は何処へ行く。――

――去年七月の末であつた。……余り暑いので、愚に返つて、こうどうも、おお暑いで
めげてはいけない。小児の時は、日盛に蜻蛉を釣つたと、炎天に打つかる氣で、そのまま
日盛を散歩した。

その氣のついでに、……何となく、そこのいら屋敷町の垣根を探して（ごんごんごま）が
見たかつたのである。この名からして小児で可い。――私は大好きだ。スズメノエンドウ、
スズメウリ、スズメノヒエ、姫百合、姫萩、姫紫苑、姫菊の藪たけた称に對して、
スズメの名のつく一列の雑草の中に、このごんごんごまを、私はひそかに「スズメの蠟燭」と稱して、内々最員でいる。

分けて、盂蘭盆のその月は、墓詣の田舎道、寺つづきの草垣に、線香を片手に、こ
のスズメの蠟燭、ごんごんごまを摘んだ思出の可懷さがある。

しかもそのくせ、卑怯にも片陰を拾い拾い小さな社の境内だの、心当の、やしき
の垣根を覗いたが、前年の生垣も煉瓦にかわつたのが多い。――清水谷の奥まで掃除が
届く。――梅雨の頃は、闇黒に月の影がさしたほど、あつちこつちに目に着いた紫陽花

も、この二、三年こつちもう少い。——荷車のあとには芽ぐんでも、自動車の轍の下には生えまいから、いまは車前草さえ直ぐには見ようたつて間に合わない。

で、何処どこでも、あの、珊瑚さんごを木乃伊みいらにしたような、ごんごんまは見当らなかつた。——ないものねだりで、なお欲ほしい、歩行くうちに汗あるを流した。

場所は言うまい。が、向うに森が見えて、樹の茂つた坂がある。……私が覚えてからも、むかし道中の茶屋旅籠はたごのような、中庭ゆきぬを行抜けに、土間へ腰を掛けさせてんぱらちやづける天麩羅茶漬てんぱらちやづけの店てんぱらちやづけがあつた。——その坂を下りかかる片側に、坂なりに落込んだ空溝からみぞの広いのがあつて、道には破やぶれく朽くちた柵さくが結ゆつてある。その空溝を隔てた、葎むぐらをそのまま斜違はすかいに下る藪垣やぶがきを、むこう裏から這はつて、茂つて、またたとえば、瑪瑙めのうで刻んだ、さき蟹さきがにのようなスズメの蠟燭が見つかつた。

つかまえて支えて、乗出しても、溝に隔てられて手が届かなかつた。

杖の柄ハンドルで搔寄せようとすると、さきがさと遣つていると、目の下の枝折戸しおりどか——こんな処ところに出入口があつたかと思う——葎戸むぐらどの扉を明けて、円々まるまると肥つた、でっぷり漢あおむが仰向あおむかいて出た。きびらの洗いざらし、漆紋うるしもんの兀はげたのを被おたが、肥つて大おおきいから、手足も腹もぬつと露出むきでて、ちゃんとを被はつたように見える、逞ましい肥でっぷり大おおき

漢もの柄に似合わず、おだやかな、柔和な声して、

「何か、おとしものでもなされたか、拾つてあげましようかな。」

と言つた。四十くらいの年配である。

私は一応挨拶をして、わけを言わなければならなかつた。

「ははあ、ごんごんごま、……お薬用か、何か禁厭にでもなりますので？」

とにかく、路傍だし、埃がしている。裏の崖境には、清淨なのが沢山あるから、御休息かたがた。で、ものの言いぶりと人のいい顔色が、気を隔かせなければ、遠慮もさせなかつた。

「丁ど午睡時、徒然であります。」

導かるるまま、折戸を入れると、そんなに広いと言うではないが、谷間の一軒家と言つた形で、三方が高台の森、林に包まれた、ゆつくりした荒れた庭で、むこうに座敷の、縁が涼しく、油蟬の中に閑寂に見えた。私はちよつと其処へ掛けて、会釀で済ますつもりだつたが、古畠で暑くるしい、せめてのおもてなしと、竹のすんど切りの花活を持つて、庭へ出直すと台所の前あたり、井戸があつて、撥釣瓶の、釣瓶が、虚空へ飛んで猿のようになはれていた。傍に青芭が一叢生茂り、桔梗の早咲の花が二、三輪、ただ

初々しく咲いたのを、苔と一枝、三筋ばかり青芒ヒトリソを取添えて、竹筒たけづつに挿して、のつしりとした腰つきで、井戸から撥釣瓶はねつるべでざぶりと汲上げ、片手の水差みずさしに汲んで、桔梗ききょうに汲いで、胸はだかりに提げた処は、腹まで毛だらけだつたが、床へ据えて、円い手で、枝ぶりをちよつと撓めた形は、悠揚ゆうようとして、そして軽い手際てぎわで、きちんと極きまつた。掛物も何も見えぬ。が、唯ただその桔梗の一輪が紫の星の照らすように据つたのである。この待遇のために、私は、縁えんを座敷へ進まなければならなかつた。

「龜茶そちゃんを一つ献じましよう。何事も御覧の通りの侘住居わびすまいで。……あの、茶道具を、これへな。」

と言うと、次の間まの——崖の草のすぐ覗く——竹簍子たけすのこの濡縁ぬれえんに、むこうむきに端居はしひして……いま私の入つた時、一度ていねいに、お時誼じぎをしたまま、うしろ姿で、ちらりと赤い小さなもの、年紀としごろで見て勿論もちろんお手玉ではない、糠袋ぬかぶくろか何ぞせつせと縫つていた。……島田鬚の艶つやつや々しい、きやしやな、色白な女が立つて手伝つて、——肥大でっぷり漢ものと二人して、やがて焜炉こんろを縁側へ。……焚つけを入れて、炭を繼つづいで、土瓶どびんを掛けて、茶盆を並べて、それから、扇子おおぎではたはたと焜炉の火口ひぐちを煽あおぎはじめた。

「あれに沢山たくさんござります、あの、茂りました処に。」

「滝でも落ちそうな崖です——こんな町中に、あろうとは思われません。御閑静で實に結構です。霧が湧いたように見えますのは。」

「烏瓜からすうりでござります。下闇したやみで暗がりでありますから、日中から、一杯咲きます。——あすこは、いくらでも、ごんごんごんごんまがござりますでな。貴方あなたは何とかおつしやいましてな、スズメの蠅燭ろうそく。」

これよりして、私は、茶の煮える間まと言うもの、およそこの編へんに記した雀の可愛さかわいさをここで話したのである。時々微笑ほほえんでは振向ふりむいて聞く。娘か、若い妻か、あるいは妾おもいものか。世に美しい女の状さまに、一つはうかうか誘さそわれて、氣の發奮はづんだ事は言うまでもない。さて幾度か、茶をかえた。

「これを御縁に。」

「勿論かさねまして、頃このごろ日に。——では、失礼。」

「ああ、しばらく。……これは、貴方あなた、おめしものが。」

……心着ここころづくと、おめしものも氣恥きはずかしい、浴衣ゆかただが、うしろの縫めぬいが、しかも、したたか綻びほころていたのである。

「こゝもとは茅屋あばらやでも、田舎道いなかぢではありませんじや。尻端折しりばしより……飛とんでもない。……

ああ、あんた、ちょっと縫つておあげ申せ。」

「はい。」

すぐに美人が、手の針は、まつげにこぼれて、目に見えぬが、糸は優しく、皓歯にスッと含まれた。

「あなた……」

「ああ、これ、紅い糸で縫えるものかな。」

「あれ——おほほほ。」

私がのつそりと突立つた裾へ、女の脊筋が絡つたようになつて、右に左に、肩を曲ると、居勝手が悪く、白い指がちらちら乱れる。

「恐縮です、何ともどうも。」

「こう三人と言うものの附着いたのでは、第一私がこの肥体じや。お暑さが堪らんわい。衣服をお脱ぎなさつて。……ささ、それが早い。——御遠慮があつてはならぬ——が、お身に合いそうな着替^{きがえ}はなしぢや。……これは、一つ、亭主が素裸^{すはだか}に相成りましよう。それならばお心安い。」

きびらを剥いで、すっぱりと脱ぎ放した。畚褲^{もつこふどし}の肥大裸体^{でつぱりはだか}で、

「それ、貴方。……お脱ぎなすつて。」

と毛むくじやらの大胡座おおあぐらを搔く。
呆氣に取られて立たちすくむと、

「おお、これ、あんた、あんたも衣きものを脱ぎなさい。みな裸体はだかじや。そうすればお客人の遠慮がのうなる。……ははははは、それが何より。さ、脱ぎなさい脱ぎなさい。」

串戯じょうだんにしてもと、私は吃驚びっくりして、言ことばも出ぬのに、女はすぐに幅狭はばぜまな帶たを解いた。膝へ手繰ると、袖そでを両方へ引落ひきおとして、雪を分けるように、するりと脱ぐ。……膚はだは蔽おおうたよりふつくりと肉を置いて、脊筋せすじをすんなりと、撫肩なでがたして、白い脇わきを乳ちちが覗いた。それでも、脱ぎかけた浴衣ゆかたをお膝に半ば挟はさんだのを、おつ、と這まうと、あれ、と言う間に、亭主がずるずると引いて取つた。

「はははは。」

と笑いながら。

既にして、朱鷺色ときいろの布ぬの一重ひとえである。

私も脱いだ。汗は垂々たらたらと落ちた。が、憚りながら褲ふんどしは白い。一輪の桔梗ききょうの紫の影は映えて、女はうるおえる玉のようであつた。

その手が糸を曳いて、針をあやつたのである。

縫えると、帶をしめると、私は胸を折るようにして、前のめりに木戸口へ駆出した。挨拶は済ましたが、咄嗟のその早さに、でっぷり漢ものと女は、衣きものを引掛ける間もなかつたろう……あの裸体はだかのまま、井戸の前を、青すすきに、白く摺すすれて、人の姿の怪しい蝶に似て、すつと出た。

その光景は、地獄か、極楽か、覚束おぼつかないない。

「あなた……雀さんに、ようしく。」

と女が莞爾にっこりして言つた。

坂を駆かけあが上つて、ほつと呼吸いきを吐いた。が、しばらく茫然としていた。——電車の音はあとさきに聞えながら、方角が分らなかつた。直下の炎天に目さえくらむばかりだつたのである。

時に——目の下の森につつまれた谷の中から、一セイして、高らかに簫しょうの笛が雲の峯に響いた。

……話の中に、稽古けいこの弟子も帰つたと言つた。——あの主人は、簫を吹くのであるか。

……そういえば、余りと言えば見馴れない風俗ふうだから、見た目をさえ疑うけれども、肥でつぶ

大漢は、はじめから、裸体になつてまで、烏帽子のようなものをチヨンと頭にのせていた。

「奇人だ。」

「いや、……崖下のあの谷には、魔窟があると言う。……その種々の意味で。……何しろ十年ばかり前には、暴風雨に崖くずれがあつて、大分、人が死んだ処だから。」——と或友だちは私に言つた。

炎暑、極熱のための疲労には、みめよき女房の面が赤馬の顔に見えたと言う、むかし武士の話がある。……霜が枝に咲くように、汗——が幻を描いたのかも知れない。が、なぜか、私は、……実を言えば、雀の宿にともなわれたような思いがするのである。

かさねてと思う、日をかさねて一月にたらず、九月一日のあの大地震であった。

「雀たちは……雀たちは……」

火を避けて野宿しつつ、炎の中に飛ぶ炎の、小鳥の形を、真夜半かけて案じたが、家に帰ると、転げ落ちたまま底に水を残して、南天の根に、ひびも入らずに残つた手水鉢のふちに、一羽、ちゃんと伝つていて、顔を見て、チイと鳴いた。

後に、密と、谷の家を覗きに行った。近づくと胸は轟いた。^{とどろいた。}が、ただ焼原であつた。私は夢かとも思う。いや、雀の宿の氣がする。……あの大漢のまる顔に、口許のちよぼんとしたのを思え。卵の毛で胡粉を刷いたような女の膚の、どこか、頤の下あたりに、黒いあざはなかつたか、うつむいた島田鬚の影のように――

おかしな事は、その時摘んで來たごんごんごまは、いつどうしたか定かには覚えないのに、秋雨の草に生えて、塀を伝っていたのである。

「どうだい、雀。」

知らぬ顔して、何にも言わないで、南天燭の葉に日の当る、小庭に、雀はちよん、ちよんと遊んでいる。

青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」川村一郎編、岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二七巻」岩波書店

1942（昭和17）年10月

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2000年8月30日公開

2005年12月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二、三羽——十二、三羽

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>